

●事例紹介●

東北福祉大学ボランティアセンターの活動と地域社会との連携

小松 洋吉

(東北福祉大学教授・ボランティアセンター長)

渡辺 信也・小拔 隆

(ボランティアセンターコーディネーター)

はじめに

ボランティア活動とは生きること学ぶ、自分について学ぶ、人間について学ぶことであると考える。そのために平成一〇年にボランティアセンターが設立された。

ここではその経緯、業務内容、地域社会との連携、さらには学生たちのボランティア活動の実際についてその概ねを述べる。

一 ボランティアセンターの設立経緯

ボランティアセンターは本学学生及び地域住民のボラン

ティア活動の推進・支援、また大学としての地域貢献を目的とし、平成一〇(一九九八)年四月に設立された。

きっかけは平成七(一九九五)年一月に発生した阪神・淡路大震災にまでさかのぼる。本学においては震災直後に学生有志が中心となり、直ちに「東北福祉大学ボランティア会」を結成。メンバーはいち早く被災地に駆けつけ、専門的知識・技術を發揮し、高齢者介助、あるいは子どもたちの託児・心のケアなど精力的な活動を展開した。活動は復興の兆しが見え始めた七月まで継続された。

このような学生たちの活動を契機に、大学として学生の「思い」、「気持ち」を今まで以上に受けとめ、よりよい活動に結びつくような環境づくりを進めるために設立されたのがボランティアセンターであった。

またそれは「自立(自律)した学生を育てる」という大学の教育方針あるいは地域社会において「新しい公共」を担う人材・活動が必要だとする社会的要請とも合致するものであった。

二 ボランティアセンターの業務内容

現在、センターでは前述の目的を達成できるよう主として八つの業務を行っている。

○ボランティア依頼の受付・紹介

学内外より広くボランティア依頼を受け、学生あるいは地域住民に向け募集情報を紹介している。

なお、依頼情報については、仙台市社会福祉協議会と締結した「パートナーシップ協約」に基づき、仙台市ボランティアセンターと依頼情報の共有化を図っている。

さらに、仙台市教育委員会と取り交わした「連携協力に関する覚書」により仙台市立学校における学校支援ボランティア活動についても随時情報を提供している。

情報の提供に関しては、学内掲示板のほか、センターのホームページ上で情報を検索できるシステムを導入し、「いつでも」、「どこでも」、「だれでも」が情報を入手できるように工夫している (<http://www.ftu.ac.jp/volunt/>)。

平成一五年度のボランティア依頼受付件数は四一七件(前年度比二〇五件の増)であり、福祉だけでなく環境、国際協力、まちづくり、スポーツなどの様々な分野から依頼が寄せられている。

一方、センターでコーディネートした活動者数は五五〇人(前年度比三四人の増)であり、本学学生だけでなく高校生、他大学・専門学校生、地域住民にたいしても活動紹介を行っている。

○ボランティア・市民活動に関する情報提供

ボランティア依頼情報以外に、関係機関・団体の活動や各種イベント・研修会、ワークショップ等の情報を提供している(例えば、ポスター掲示、パンフレット・情報誌の設置など)。

○相談支援

ボランティア活動に関する疑問や質問あるいは活動中に悩みが生じた際に適切な支援・アドバイスが行えるよう、常時相談窓口を開設している。

○講座・研修会の企画・実施

ボランティア活動の啓発や活動者・サークルのスキルアップを目的とした講座・研修会を企画・実施している。なお、昨年度は一〇回講座を開催し、市民にも公開している。

○国際協力活動への支援及び学生への啓発
国際協力活動への支援・啓発を目的とし、個人・団体で活動を行った学生ボランティアの体験報告会や国際協力機構（JICA）と連携した国際協力事業の紹介等を行っている。

○学生ボランティアとの協働

学生のニーズに即応した業務を遂行するために、学生ボランティア（団体名：Withボランティア）とともに様々な取組を行っている。

○イベントの開催

センターが設立五周年を迎えることを契機とし、より一層のボランティア文化の振興と創造を図ることを目的とした、「ボランティア感謝祭」を昨年より開催している。具体的には、福祉施設・団体への感謝状・車椅子の贈呈、あるいはボランティア・地域活動者等による活動報告、本学卒業生であるプロ野球選手からのお宝グッズ抽選会など会場と一体となって楽しみながら活動の魅力を共有できる内容となっている。

○履修科目「福祉ボランティア活動Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」の単位認定に関する業務

本学では日本の大学として初めてとなるボランティア活動にたいする単位認定を平成五年度より実施し、体験をと

おして学ぶ学生たちをバックアップしている。

三 ボランティアセンターと地域社会との連携

○文部科学省委託生涯学習まちづくりモデル支援事業「地域防災力向上のための自主防災組織の育成」

地震国日本において震災の発生に際し、生命・身体・財産の損害を最小限に留める、いわゆる「減災」が急務の課題となっている。そこで、今年度、行政、市民活動団体、企業などとともに「地震に強いまちづくり実行委員会」を組織し、地域防災力を向上させることができる人材の育成、フォーラムの開催やハンドブックの作成を推進している。本学学生もホームページを作成し事業推進状況について情報発信したり、委員会においてオブザーバーとして参加するなどしている（写真1）。

○青少年健全育成のための「TFUこども広場」の開設

【宮城県共同募金会配分事業】
今年度、「ものづくり」や「スポーツ」などの体験活動をとおり、知・心・体のバランスがとれた、感性豊かな子どもの成長の育成支援を目的とし、小学生を対象とした「TFUこども広場」を開設している。具体的内容としては、「ニュースポーツ」、「そば・うどんづくり」、「創作

（おもちゃづくり）、「野球」、「アート」、「アロマ」などである。

なお、開設にあたっては文部科学省学術フロンティア推進拠点となっている「東北福祉大学感性福祉研究所」の研究成果などが生かされることとなっている（写真2）。

○仙台市社会福祉協議会との「パートナーシップ協約」の締結

新しいボランティア社会の構築及び学生と職員の資質向



写真1 生涯学習まちづくりモデル支援事業委員会の様子。本学学生もオブザーバーとして委員会に参画しています（写真中央）



写真2 「TFUこども広場」の様子。本学学生もボランティアとして活動をサポートしています



写真3 仙台市社会福祉協議会との「パートナーシップ協約」締結の様子

上に資するために、仙台市社会福祉協議会と組織的、継続的な連携・協力体制をより強化することを謳った「パートナーシップ協約」を締結した。

具体的には、ボランティア活動に関わる人材育成や調査・研究・開発あるいは災害救援ボランティア活動支援などの事業について連携・協力し取り組んでいく（写真3）。

○青少年健全育成のための「ものづくりボランティアリーダー養成講座」の実施【宮城県共同募金会配分事業】

地域全体で子育てに関わっていくきっかけづくりとして、地域において子どもたちにもものづくりの楽しさを伝える「ものづくりボランティアリーダー」の養成講座を行っている。昨年度は、「創作」、「日本食」、「工芸」など六コース一五回の講座を開講した(写真4)。

○ボランティアセンターオリジナルバッジの作製
ボランティア活動の広がりを目に見える形にし、地域住民のボランティア活動への参加意欲の高揚や安心感の向上を図ることを目的とした「オリジナルバッジ」を本学芹沢銚介美術工芸館と作製し、センター主催の講座受講生等に

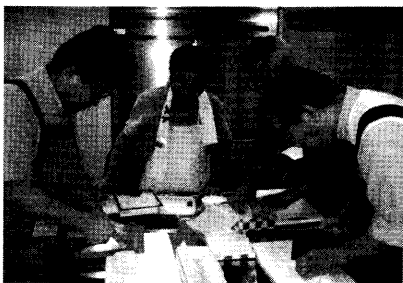


写真4 ものづくり講座の様子。地域の方々と交流しながら学習しています

配布している。

バッジの中央に描かれている「心」の字は型絵染の人間国宝、故芹沢銚介氏のデザインとなっている(写真5)。



写真5 ボランティアセンターオリジナルバッジ

なお、株式会社リクルートが行った「大学教育改革の学生認知度調査二〇〇〇」において、本学は「単位として認めるなどボランティア活動を積極的に支援している」の項目で全国一位となっている。

さらに、宮城県内のボランティア団体により構成されている「宮城県ボランティア協会」より地域福祉の向上進展に寄与した団体等におくられる感謝状が授与されている。

四 学生のボランティア活動の実際

○ボランティアセンター支援サークル「Withボランティア」

学生の視点からボランティアセンターのスタッフと一緒に学生ボランティア活動をサポートする団体で、「共に考える・行動する(with)」の視点・発想でボランティアの企画・運営に参画し、より学生のニーズに応えられる

ボランティアセンターにするために活動している。

ボランティアに関する相談を同じ学生としての立場で受けるなどし、よき話し相手となり、解決へのサポートを行っている。また、新しいボランティアを学生同士あるいは、センタースタッフと考えたり、ボランティア活動講座の企画・運営の補助、あるいはホームページの制作を行っている。

これまでの活動として「ボランティア・サークルリーダー研修会(平成一五年九月二六日)」や「社会福祉協議会を知る勉強会(平成一五年一月二日)」の開催、「ボランティア感謝祭」のプロデュースなどがある。また、平成一六年一〇月二三日・二四日に本学で開催された大学祭においては仙台市消防局や仙台市防災安全協会等と連携し、地震対策マニュアルの作成、地震に関するパネル展示会や防災ビデオの上映や防災グッズの展示などを行った。

○ECOボランティア推進事業

地域社会の一員として「住み良い魅力ある環境づくりへの貢献」、「クリーンアップ活動を通じた環境保全活動の啓発」、「自然・地域社会・大学を大切にすることを」を目的に三〇名余の有志学生が昼休みと放課後に学内外のクリーンアップや提言、住民との相互学習などの活動を行っている。

○福祉ITボランティア推進事業
福祉サービスが「措置」から「利用者本位」に移行するなかで、サービス提供者やサービス内容に関する様々な情報を利用者自らが比較・検討し選択できる環境を整備していく必要がある。そのためには事業所がホームページを開設する必要があるため、それを本学学生のボランティア活動として行ってきた。

また、東北福祉大学は福祉系のサークルやボランティアサークルが多いのが特徴で、外部からのボランティア依頼に関する問い合わせも多い。そこで、活動内容を知ってもらう、受け身ではなく自らできることを発信していくために、現在は学生サークルのホームページ立ち上げの支援に力を入れている。

○災害ボランティア活動

平成一六年七月一三日に起こった「新潟七・二三水害」では被災地へ行き、家屋に入り込んだ泥などを運んだりする作業を行い、現地入りできない学生は仙台市中心部で義援募金活動を行った。また、平成一五年七月二六日に発生した「宮城県北部連続地震」では本学学生一五〇人が災害復旧支援活動を行った。被害が大きかった南郷町を中心に家屋の廃材の分別や瓦礫の撤去活動など精力的に活動した。

本学では平成七年に起こった「阪神淡路大震災」や平成九年には「日本海重油流出事故」、平成一〇年には栃木県那須町周辺を襲った集中豪雨の際にも、学生たちが復旧活動に駆けつけ、地域住民から感謝されている。

○平成一六年度仙台市社会福祉大会

社会福祉の発展に功績のあった個人・団体を表彰する大会が平成一六年九月一日に開催された。団体部門では「ボランティアサークル天使村（以降、天使村）」が表彰された。

天使村は昭和五五年から児童養護施設・天使園で生活する子どもたちとの遊びを通して、子どもが置かれている現状や心情を理解し、支えることを目的として活動している。例えば、地域福祉の発展に寄与することを目的とし、「遊び」を通じ大人と子どもと向き合う場である「天使祭」というお祭りを開催している。チャレンジ精神と目的に向かい真摯に努力をする姿勢は、地域の生活課題を解決し、地域福祉に求められるリーダーの資質でもあろう。

また、個人部門では本学社会福祉学科四年の五十嵐智史氏が表彰された。前記「Withボランティア」で活躍し、課外活動では共同募金会での募金活動、高齢者施設への訪問活動、障害者施設での付添・作業補助、タイワークキャンプ、全国ボランティアコーディネーター研究集会実行委

員として企画・運営を行うなど地域社会あるいは全国、国際レベルで多様な活動を行っている。

○ラジオボランティア

せんだい泉FM放送株式会社との協働による、市民のボランティア活動の啓発を目的とした番組（「福祉ボランティア情報コーナー」）の制作・運営を行っている。ラジオを聞いた市民に多く活動に参加してもらえよう、ボランティア情報の提供を行っている。

○学生ボランティア団体支援

本学のサークルや団体に対し、ボランティアセンターではボランティア活動の場や情報の提供を行っている。

◆福祉施設などでのイベントで、落語を披露してほしいという依頼は、本学公認サークルの「落語研究会」に紹介し、「笑い」によつての健康増進や外部との連携強化を目指し活動している。平成一六年一〇月二日、三日に『杜の都の市民環境教育・学習推進会議』主催の「環境フォーラムせんだい二〇〇四」のイベントに出演し、市民から笑いをとることを成し遂げた。

◆大学公認サークルの「BEAUTYS」はビューティーケアというマツサージを中心にデイサービスなどの施設訪問を行っている。高齢者へマツサージによる癒しの効果や「美」を追求し、地域に根付いた活動を行っている。毎

年、「仙台市高齢者生きがい健康祭実行委員会主催で開催される「仙台市高齢者生きがい健康祭」ではビューティーケアのブースを設け、大勢の人が利用し大盛況だった。また、平成一五年六月七日にBEAUTYSが主催となった「ビューティーケア・ほっとケアのつどい」のイベントを開催するなど活動の幅を広げ活躍している（写真6）。

◆長年にわたるボランティア活動が評価され、「善行青少年」として首相官邸で表彰を受けた。受賞者は全国で一二名、東北では本学学生の小林辰洋氏一人だけだった。中学一年生の頃からボランティア勉強会に一年間通ったのが始まりで、養

護施設を訪問したり、耳の不自由なお年寄りとお話しようとお話を習っていた。

◆本学には「講義保障班」というサークルがあり、聴覚障害者の学生の聴講を手助けしようと発足。講義内容



写真6 「仙台市高齢者生きがい健康祭」における活動の様子。毎年、多くの来場者に喜ばれています

を同時通訳の形でノートに書いて伝える活動（ノートテイク）を続けてきた。手話講義のない大学では孤独感や不安を抱く学生もいる。そこで、本学学生を募りノートテイクをすることによって、障害者とのコミュニケーションや大学へ来て不自由な思いを感じさせないよう活動している。現在はノートテイクを超えたキャンパスでの障害者サポートを行っている。障害のあるなしに関係なく誰もが自由に学べるキャンパスを夢見て活動を続けている。

おわりに

今後、福祉社会の構築にボランティア活動が重要な役割を果たすことはいうまでもない。

地域社会のニーズを察知し、新しい活動を開発・提案・創造する二一世紀型ボランティア社会の構築に向けて地域社会（＝市民）と一体となった取組をより一層推進していきたい。